

ぐんぐんに煮過ぎたうどんの事、みんなで「ぐんぐん」って呼び

ませんか？【一本目：メロブの闖入者ども】

冷静になって考えてみると、やはりシチュエーションがエロい。

なぜ我々は違法法アップロードされたエロ同人を、ふたりして放課後の部室で黙読しているのか……？

たつきからイーダ先輩が勧めてくれた、黒沢ダイヤがポリネシアンセックスをするエロ同人を読んでる。エロい。なんだポリネシアンセックスって。初めて聞いたわ。いや、エロいんだけど、エロ同人以上にこのシチュエーションがエロい。



ポリネシアン表紙

放課後、部室、イーダ先輩、エロ同人(違法法アップロード)、ポリネシアンセックス、黙読……。やすつちい長机を挟んで斜め前に座っているイーダ先輩をちらと見やる。イーダ先輩が視線に気づいてこっちを見る。ぱちつと目が合う。イーダ先輩はニヤッと笑ってすぐに視線を手元のノートに戻した。無線マウスをスクロールさせて黙読再開らしい。

俺は黙読に戻る振りをして、視界の端でイーダ先輩をぼんやりと捉え続けていた。

肩口でパツッと切りそろえられた黒髪のおかっぱ(ボブ)というやつかもしれないが、俺は髪型に全く詳しくないのでよくわからない、赤い葉っぱの髪留め、ところどころとしたいつも眠そうな両目、制服の赤いボン、紺色のベスト、細い腕の割には大きめの手のひら。

はい、エロアイコンの数え役満。エロい先輩とエロ同人を読むというシチュエーションのエロさ。これもうエロ同人だろ。

「ふんっ、ふんっ、ふんっ」

「めっ、めっ、めっ……」

「だっ、だっ、だっ……」

イーダ先輩は食い気味に無線マウスをガーンとスクロールさせる。

俺の意識は、スマホの中のエロ同人と、今ここにあるエロシチュの間を反復横跳びしていた。気が気ではない。もう違法アップロードの内容はほとんど頭に入っなくなっている。性的な興奮が高まっているのではなく、唐突なエロシチュに混乱しているのだ。だから局部は勃たない。性的興奮と混乱は別物である。

大事なことなので復唱しよう。性的興奮と混乱は別物である。

……落ち着け、餅つけ、おみおつけ。ダメだ、しょぼいライムを刻んでしまっくらいいは余裕がなくなっている。思考が散発的だ。ぱっぱっぱっつと感覚が切り替わっていく。切り替わったそばから意識がエロシチュに引き戻される。吸引力の変わらないポリネシアンセックス。エロの中から現れるエロ。エロのマトリョシカ。マトリョシカ。

イーダ先輩の後ろに飾られているけし型のマトリョシカに目が向いた。俺が入部する遥か前から部屋に置かれている年の入った品物らしい。表情がなんとなくアンニユイで、笑っているようにも怒っているようにも見える。目元がイーダ先輩に似ていなくもない。つまり、このマトリョシカはエロといこういこうなのか？ マトリョシカの中から現れるイーダ先輩。イーダ先輩。



けし型マトリョシカ

「てか、エロ同人買いにいかない？」

「え、マジっすか」

「おおっ、マジっすか」

「え、なんでっ？」

「なんかさ、違法アップロードのやつだけ見るのなんか申し訳ないじゃん」

「えっ、っ？」

「えっ、っ？」

もはや語感でしか会話をしていない。しかし、イーダ先輩にそんな倫理観が残っていたとは。殊勝だ。

「×ロブすか？」

「そーね」

エロ同人と言えばメロブ、メロブと言えばエロ同人。俺たちの学校からは少し離れたところにメロブが一軒ある。メロブにはありとあらゆるエロ同人がある。つまりは、この世のすべてがそこにある。だから俺たちは、手を伸ばした。仰ぎ見れど決して届かない空の果てまで。翼が折れる運命にまどくとは、俺たちが羽ばたかない理由にはならない。下方を省みない崖上の愚者に、助走はいらない。



愚者の正位置

それではっー！ はっキってメロブにイクッー！

\*\*\*\*\*

ギンッ、ギンッ、ギンッ

はっ、はっ、はっ、はっ

俺は小刻みに下半身を動かし、その振動に合わせて吐息を漏らす。

イーダ先輩の後頭部を見ながら、速く動かし過ぎないように注ぎする。

ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ

はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ

イーダ先輩が、一瞬振り返って俺を流し見る。イーダ先輩も俺に合わせて下半身を動かし続けている。身体を動かしているからか、心なしか目がいつもよりとろとろしている。お互いの吐息が重なってひとつのリズムになる。

俺だけ先走らないように、スピードを慎重に調節する。指が汗ばむ。

ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ、ギンッ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、

ギンッ、ギンッ、ギンッ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、

赤信号が見えたので、俺とイーダ先輩はブレーキをかけて止まった。

ふたりして、横断歩道の手前で信号が替わるのを待つ。ゆっくり漕いでいたつもりではあったが、夏真っ盛りというところともあって、少し漕いただけでも息があがってしまっていた。なんとこの暴力的な気温だ。あちい。イーダ先輩もハンカチを取り出して汗をぬぐっている。

「ちんぽの自転車、おれんじのパンツ、おれんじのパンツ」

ハンドルに上半身を持たせかけながら、イーダ先輩がいつもの文句を言う。俺のオンボロ自

転車は、ペダルをこぐたびにギシギシと耳障りな音を立てて軋むのだ。

「ブイーンテージものじやね」

「早くメルカリで売って新しいの買え」

「もっと価値上がるまで寝かせようぜ」

信号が青に替わった。

俺とイーダ先輩は下半身の動きをおもむろに再開させる。

ギシッ、ギシッ、ギシッ

はっ、はっ、はっ、はっ、

イーダ先輩と俺が並んで漕ぐときは、いつの間にかイーダ先輩が斜め前を先行している。狭い都市部の道では、並んで走ると歩行者の邪魔になってしまう。だからといって、お行儀よく一列になって走る高校生はあまりいない。なんとなくお互いを視界に収めながら、一列になりさらない一・五列ぐらいの折衷案で、俺たちは街路の風を切る。俺のプリミアなオンボロ自転車は、ほぼ常にイーダ先輩の後塵を拝しているのだった。ギシギシ言っばかりでアンアンが無いのが寂しいところだ。

そう言えば、エロ同人の童貞ものでよくある、「気付いたらホテルにいました」的なシチュエーションってマジでありえないよね。そんなスパッとカットできるほど童貞にとって軽いプロセスではないだろう、たぶん。バスローブまで着てから「ほ、ほんとにするの?」「みたいなりあくシヨにするのしらじりしますギル。焦るところはその前段階だろうが。全く現実味がないぞ。」

と、こ、こ、おろしながらも懲りずに童貞ものをクリックして悪質サイトに飛ばされる、というのを繰り返すまでが童貞のたしなみである。知らんけど。



とっぴい童貞

まあ、こっぴあえず俺は今のメロブにイク瞬間の道程は覚えてますよっつ(童貞だけに)エロ同人特有のうるさい掛詞。

斜め前のイーダ先輩が、一瞬振り返って俺を流し見る。

ギンツ、ギンツ、ギンツ  
はっ、はっ、はっ、はっ、

\*\*\*\*\*

着。

なんだか公民館を思わせるようなレンガ張りの建物の二階。そこにお目当てのメロブはあ  
る。



めろぶ

目立たないところに自転車を違法駐車して、イーダ先輩と俺はえっほえっほと階段を上った。  
イーダ先輩の雰囲気とか俺の心持とかは、不思議といつもと同じような感じだった。

「……」

いや、前言撤回。先輩はともかく、やっぱり俺は緊張してるわ。部屋にいた時の混乱を微妙  
に引きずったまま、頭がふわふわしている。心臓が速くなるような感じではないけれど、これ  
はこれで緊張の一種だ。きつと。

イーダ先輩も緊張してるのかな。イーダ先輩は突拍子もないことをする割には、いわゆる  
「常識」もそれなりに持ち合わせているから、エロシチュに意外と頭がふわふわしているのかも  
しない。イーダ先輩の大胆さは肝が据わっているとはまた違っただろうな、と思っ。

入店。

何回か来たことがあるので、店内のレイアウトは見覚えがあるものだった。  
てか、そんなことばどつでもよかつた。

はい、浮いている。もちろん物理的に浮いているわけちゃうよ。イーダ先輩と俺のふたり組みが  
浮いてるって意味ね。というのも、店内は案の定、ソロプレイヤーばかりだったからだ。平日  
のこの時間帯って、特にそうなのかな？ 普段この時間帯に来ないからわかんね。まあ、何が  
とは言わんが、あんまりふたり組みではこないひとが多いかもしれないね。わかんね。

まばらに存在する三十代から四十代らしきソロプレイヤーたちのそばをふたりで通り抜けるたび、いけないことをしているような気がする。同時に、このシチュを自慢したいような気もする。そして、自慢してしまいたくなる自分に、少し嫌な気持ちを感じている節もある。この妙な後ろめたさと、見栄と内省の化合物は、取り扱い注意な代物だと俺は直観した。だから、すべさま見ないふりをした。何がと言わんが、俺たちは多分メロブの闖入者だ。

さて、入ってすぐのところにあるふつりの漫画コーナーはジャブだ。ジャブのコーナーだ。本丸はエロ同人コーナーだが、いきなり直行するのはどうにも気が引ける。ひとりならいざ知らず、今はイータ先輩も一緒にいるのだ。もうちよつと、こら、前戯とか必要なんじゃないですかね……。童貞は気が遣えるのだ。そりゃあ、早く右ストレートを打ちたいが、意識的に今はもう少し知らないふりをします(大○建設)。

“

ごめん、同級会には行けません。  
いま、シンガポールにいます。  
この国を南北に縦断する地下鉄を、私は作っています。  
本当は、あの頃が恋しいけれど、でも……  
今はもう少しだけ、知らないふりをします。  
私の作るこの地下鉄も、きっといつか、誰かの青春を乗せるから。

しかしながら、同級会（同窓会）を当日ドタキャンしたとみられること。忙しいアピールをしているわりに、同級生からのメッセージに1分で返信していること。そして同級会に参加できないことだけを言えばいいのにもかかわらず、長めの自分語りをし始めたことから、主にTwitterや5ちゃんねるなどでネタにされ、主人公は「シンガポールマウントネキ」と呼ばれるに至った。そこから転じて、冗談交じりで誘いを断る際に「ごめん、○○には行けません。～（以下略）」というコピペ改変がTwitterなどでされるようになった。

と、俺がいらん気を回しているうちに、イーダ先輩はずんずんとエロ同人のコーナーに進んでいくのだった。うわあ、いくねえ〜。何か変なところで躊躇ないんだよな、イーダ先輩は。でも繰り返すけど、「このひと」常識めいた感覚は割と持っている。だから、身体は動いてるけど、内心、結構焦ってるみたいなのをよよく見かける。それはそれとして、何事にも先輩はあらまほしきことなり。何も考えずに俺はこのイーダ先輩の後ろについていくのだった。

うわ、表紙も背表紙もピンクっ。ピンク過ぎる。岡崎京子かよ。



あや〜、買っていないのに内容を思い出せるタイトルがちらほらあるぞ〜。不思議だな〜。徳を積みすぎで転生前の記憶が残っちゃったか〜。転生前にはこのタイトルたち出版されてないんだけども、それはもう少し知らない分りをします。

エロ同人コーナーに入ってから、俺たちはわかりやすく歩く速度を緩めていた。ゆったり回覧モードである。イーダ先輩がおもむろに平積みされている一冊を手に取って俺に見せる。でかつ(主語は勝手に補ってあげ)。

「このっの好きなのっ」

「これはね〜ちよっと違うんすよね〜」

イーダ先輩もまだまだミント検定四級である。

「そっなんだ」

「絵はいいですけど、ロングより短めの方がね、このっ、いいんすよね」

話してて思ったけど、俺、小声すぎる。店内のエアコン効きすぎて凍えてんのか？ イーダ先輩の音がよく通る分、半ば反射的にこり合いをこらうとしてる感じがあった。でもイーダ先輩の声はよく通るのでこり合いは徒労。

「確かに、ミントがすぎなやつ、みんなショートだわ」

「でこよ。そこで俺、胸はでこまほポイント高くないとで」

「尻?」

「いや脚。あと膝裏」

「膝裏〜」

「ほう、なんかこのすとーんとした脚のうっつかわが見えてると、興奮するんですよ」

「え、意味わからん。へんたいじゃん」

うるせえ。ポリネシアンセックス好きに言われたくないわ。冬服にマフラーを巻いた高校生が丈の短いプリーツスカート履いてる後ろ姿を想像してみ？ いいだろ、膝裏。え？ 理解できない？……おいおい、まだそんなこと言ってるのか？ 来いよ、「高み」へ。

「あ、ミナのおすすめ」

イーダ先輩が指す先には幾花にいろいろ短編集「丹」あか「」があつた。表紙が見えるように置かれていて、幾花ちゃんのきれいな絵がぱつと目に飛び込んできた。

「あー、お世話になってますね」と

いやその節はごーもごーも、はははは。ぱつと手に取って裏表紙を見る。うお、がっすり陰毛もいつか表紙見る。うむ、乳首。

「絵がね、いいんですよね。」の骨ほつた感じと「いっ、線の細いやい」

「たしかにめっちゃ絵下手」

「あ、話もしっかり作ってるんですよ。展開のナチュラルさが妙にエロいっす」

「幾花ちゃん、シンプルに漫画ついで」

「です。う。いやーいごよなーやっほ」

「ミミックウスをひっくり返しながら絵をためつすがめつする。乳首、陰毛、乳首、脇、腰回り。

「買〜」

「……うーん、やめときます。金ないんで」

はい、ひよつた。なーにが「金ないんで」だ。なんか周りからちらちら見られてるような気がして、咄嗟「今日はやめときますわ(笑)」みたいな感じで気取ってしまった……。メロブの闖入者、緊張中。いやほらあれだし。十八禁だからな、十八ちゃんになってから買った方がいいよ。ウンウン。

「先輩はどれ買つんですか」

「んー……」

イーダ先輩が目の前にあるお試し読みをすつと取ってページをめくる。

「え、「れめっちゃエロ」」

「マジですか」

覗き込んでみると、雨のバス停で、濃厚なプレイが進行している場面だった。おおお、絵がうめえ。なんか描写も凝っている。

「いやー、「れごっこ」

と言いながら、先輩はお試し本を元の場所に戻して、また別のお試し本に手を伸ばした。ギヤルものだ。表紙に「いいからちのポ貸せよ……」と書いてある。おもしろ。なんでエロ同人ってこ



う煽りが巧いのか。

「金髪すきだっけ？」

「めっちゃすきですわ」

「これはごーすか」

「めっちゃめかっただすね」

「読んでるんかーい」

違法アップロードを読んだとはひょっとしても言っていない。「のお試し読みを読んだ可能性たつてある。何もやまじいことほはない。ちなみに、転生前に読んだやつなのでセーフである。

エロそうな本をイーダ先輩が取る、俺が小声でくそす、先輩が棚に戻す。周りの目を常に気にしながらも、そのサイクルを繰り返す。店内の冷房は効いているけれど、手のひらが少しだけ湿っている。手先は冷たいのに手汗が出る。じんたいのふしぎ。またの名を軽度の緊張、あるいは……なんだろうっね。わからんね、エロいね。

そのうちいるうちエロ同人コーナーを大体一回りした。イーダ先輩がうーんと低く唸っている。

「いいやつありました？」

「うーん、決め手にかけるかな？」

「まあポリネアンセックスな感じですわ」

「別に他のでも興奮するわい」

「例えば？」

「……首絞め」

あ、ソウスカ。ちょっとぼくそつちはわからないんで遠慮しますね。へはは。あからさまに身体を引いたら、イーダ先輩が唇を尖らせて「ぼーん」と軽く腹パンしてきた。やだなあ、何も言っていないじゃないですか？。

「今口は買っつの止めるわ」

言うのが早いかイーダ先輩はエロ同人コーナーの反対方向に足を向ける。収穫なしのようだ。もしかしたら、先輩も俺みたいにひよつたのかもしれない。突拍子もない行動をとるひとはあるけれど、変なところで小心者なのだ。案外。終始イーダ先輩の後の「の」に着いていく俺ももちろん小心者ですわ。

「あ」

「え、なに？」

「あだしまの最新刊について」

俺はフンベーカーに平積みされている「安達としまむら」の最新刊を一冊手に取る。そう言えば、今日が発売日なんだ。つむ、買おう。金がないんじゃないのかという小言が聞こえてきそうだが、当然知らないふりをします。

「ちょっと買ってきますね」

「ほーん」

ラノベみたいなそれなりの工口々を含んだ作品は、レジに持っていくのにちょっとばかり勇気がいるのだが、今日は感覚が普段とは違うので、相対的になんか全然いけた。ラノベは十八歳未満が買っても何ら問題はないのだ。「この安達としまむらのすとーんとしたい感じの脚だって問題はない。きつと膝のうらつかわがが良い感じなのだ。きつとね。」

\*\*\*\*\*

行きは自転車を漕いできたのだが、帰りはお互いに手で押してゆっくり歩く。時間帯的に暑さのピークは過ぎてきているので、風邪を切らなくても、まだいける気温にはなっていた。それでも暑い。自転車を押しながらイータ先輩が器用にスマホをいじる。俺のスマホに通知が来た。タップして確認する。

「なんすかこれ」

「この前つごん屋で食ったつごんにゴキブリが入ってた」

「うお、や、や」

まじでちつこいゴキブリが入っている。これは災難だ。昆布か何かと間違えてそのまま食べちゃいそうなあたり、たちが悪い。

「これは金払いたくないすね」

「びっけりしすぎって何も言えんかったわ……」

「やっぴり寝なや」ころで小心者である。

「ミミはつごん派？、ソバ派？」

「つごん派すね」

「おー！ わたしもつごん派。鍋に入れたつごんどのやつすき。つごん」

「つごんどのもいいですけど、俺は讃岐のガチガチの方がすきすね」

「かーっ、お前わかっでないわ」

やれやれと言った風にイータ先輩が首を振る。なんでだよ、つまいだろガチガチのつごん。すだち入りのガチガチぶっかけつごんすき。

つごんダイバートが白熱しかけたところで、毎度のお別れ交差点に差し掛かった。ここから先、勤勉なイータ先輩は塾へ、急情な俺は自宅へ直行である。

「はいじゃまた明日」

イータ先輩がしゅぽつと手のひらを顔まで挙げた。俺もそれに合わせて「うす」と気の抜けた返事をする。イータ先輩が反対方向に自転車を漕ぎ始めたのを見て、俺もオンボロライドにまたがった。ギシギシギシギシ。

部活動。イーダ先輩と俺は同じ部活に所属している。公式には週二回の活動なのだが、ここ最近、俺たちは毎日活動中だ。部活動とは全く関係のない活動しかしていないが。部屋にいたので部活動である。美術館にあれば便器でも美術品なのだ。コンセプチュアル部活動。

俺とイーダ先輩は、多分明日も部屋に行く。間違えた部屋にイクッ！

今日の事を思い出しながら、自転車を漕ぐ。放課後、エロ同人、ポリネシアンセックス、メロブ、幾花にいろ、ギャル、ゴキウどん。ハイライトはイーダ先輩とのメロブ珍道中。行為もエロいけど、エロはシチュだよね。あだしまだってそうなのだ。ソフト百合はシチュ。おっと、そんなことを考えてたら今更ながら勃ってきた。いつもと同じような感情を思い出して、不意に性的興奮が亢進する。通い慣れた道は安心感がある。やっぱり、混乱と性的興奮は別物なのかもしれないなかった。

俺の中のエロは、わりかし保守的なんだろうな、と思う。俺はぶどぶどこのうどんよりもガチガチでシコンソのうどんの方が好きなのだ(エロ同人特有のうるさい掛詞)。

(終)

